



**鴻
文
会
会
報**

第 7 号
発行・鴻文会
753 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

回 想

鴻文会監事 森田良吉

山並みに囲まれた盆地の四季は変化に富んで美しい。山口大学キャンパスの裏手から北を眺望すると格別である。東鳳翽から西鳳翽山と峰が連なり、その間に地藏峠のひと区切りがあつて、東西の稜線はやや異なっているが、双翼を広げた鳳凰の姿にたとえられる風景である。北風の吹きつける季節が到来すると、銀白色の峰に変わり朝夕の日をうけると輝く。悠久の昔から続いた姿であろう。

原始・古代人の営んだ生活の場は、自然・風致ともに条件のそろつたところである。農学部演習地から下るなだらかな傾斜地には、縄文晩期から弥生、古墳時代から室町期へと続く住居跡などが埋蔵されている。キャンパスの南の丘には、室町前期の建造物で重要文化財の平清水八幡宮が吉田・平井の総鎮守として鎮座している。

二十数年前、まず最初は農学部の山口移転地として着目された。そのころこの地区は他人の入り込みを受け付けない、閉鎖的な純農村であつた。このような農村を説得して、そのうえ地権者の理解をうることは容易ならぬことであつたと聞いている。

農学部移転の先鞭者である農学部長土井弥太郎先生は率先して、これらの難問題にあたられた。先生の実践に徹した学問の有り方、温和な風貌を思いださずにはおれない。

その後、山口大学の総合移転と展開し、順調に進んだように思う。山口市が学都として面目を一新した。また旧市街地の殻から脱皮して、ようやく周辺に広がりを持つにいたる時代の契機が山口大学の移転の期であつたと思う。

「鴻文会報」第七号の発刊の機会にあつて、つい往時をしのぶにいたつた。「鴻文会」の命名の発想は和田敏英教授で、創刊号に「山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来に雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字を継承する」と巻頭言にある。

鴻峰の山名は高嶺(タカミネ)の転じたものである。鴻文会を高文会に置きかえることもできる。山名の由来はともかくとして、この峰の麓に居住して学び、また勤務して約半世紀が経過した。鴻文会の名にふさわしい努力と精進をと思うとき、さらに鳳翽山のように大きく雄飛したいと思うこのごろである。

(国史学・文理第四回卒)

私の中の山大・山口

バイト学生の青春の足跡

松尾龍彦

(社会学・文理第二回卒)

山口を遠く離れていると、移り変わる四季の自然の美しさが、懐かしく思い出される。後河原の清流と桜、亀山の静寂と青葉、湯田のホタル、錦絵の如き五重塔辺りの紅葉、榎野川岸の枯れススキ。恵まれた自然の美の中に、四年間の青春の足跡が残されている。

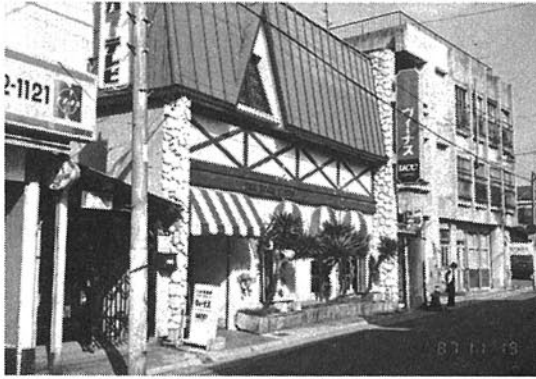
オリオン星座を仰ぎ、友と人生を語り、寮歌を口ずさみ、散策した夜もある。貧しきバイト学生だったが、明日への希望と活力だけは失わなかった。

寮生活(鳳陽寮)二年、下宿生活二年、思い出すままに、青春の譜を綴ってみよう。

まだ旧制高校の雰囲気が残る寮生活、高歌放吟、破滅的泥酔の長髪の輩、そして、誰とも知れず、しとしとと降る深夜の「寮雨」。

空腹の時代でもあった。食券は現ナマより重宝され、食堂への運刻は欠食を意味していた。ピーナツ十数粒と茶のがぶ飲みで耐えた友もいた。懐かしき師は、飢えたる若人に夕食のイモメンで接待してくれた。

バイトの時代だった。喰うための金稼ぎ、土建屋のトラックで寮から出勤。セメントがつぎで、海に落ちた三田尻の港、真冬の電柱穴掘りで泣いた小郡の現場、汗と涙が落ちている。高報酬は山口駐屯の米軍キャンプ。アルミの食器洗い、洗剤の存在を初めて知る。後に、朝鮮動乱の激戦地に部隊の派遣を聞



「フィンランディア」を聴いた「ヴィーナス」

く。十九歳の少年米兵の運命は知らない。朝鮮動乱、血の皇居前メーデー事件、中央の混乱は地方にも敏感に伝わった。破防法に反対の学生運動、ノンポリも立看を書き、デモに加わった。幼稚な政治論議ながら、目覚めの意識だけは昂揚していた。

学生生活後半、猛烈に読書欲にかられる。ジニメル社会学、思想史を中心に手当たり次第に読破。授業にも出た。経済の連中と社会科学研究会を設置。ほのかな初恋もした。

やがて、「糸米時代」の青春は終わり、帰郷した。生きることに情熱を燃やした山口の四年間を誇りにしている。

大学のキャンパスが平川地区に移転したと聞く。人文学部の充実と発展を祈りたい。十数年、山口を訪れる機会がない。一度ゆつくり青春の地を散策し、足跡を訪ねながら、美しき自然にひたりたい。

(NHK解説委員)

潮見先生

芳西靖幸

(社会学・文理第十一回卒)

私は根っからの山口人間、分家とはいえ四代目。家の事情もあって山口から出られず山口大へ。卒業後も長男でもあり山口の地から離れること下関市へ三年だけ、まさに「井の中の蛙」である。ですから私の中の山大は、多くの先輩・友人や先生との出会いであつた。

その中でも研究室の潮見、近沢、山本の三先生には大変な教えを受けた。勿論、大学の講義・ゼミ・コンパなど通常の触れ合いは云うに及ばず、よくお宅も訪問し、バス通学途中下車し喫茶店にも行ったものである。もう一つは、大学四年間に何か一つ続けられるものをと思い、クラブ活動を考え、友人の進めもあり二・三のクラブを訪ねたが時間ルーズで拘束されすぎるため入部せず、結局日記に自信がないので家計簿を四年間つけることになり、今日大変役立つ。私、いい教師

いい生徒が生まれるという考え方がありますが、いい生徒たらんとする心掛け本人にとつていい教師をつくらせよう、いい弟子でいい師匠生れるの考え方をもちたてはと常日頃思つてはいたものの、やはりいい恩師なくしては今日の私はありえなかつたと思つています。

特別に就職とかアルバイトのお世話をいただいたとか、お金を貸してもらつたとかではないが、スポーツ好きぐらいで無口で人との接触にあまり積極的でない私が専攻課程に入ると徐々に変わってきたのは、先輩・友人に恵まれていたとはいえ、大きな要素は、やはり

恩師との出会いであつたと思う。

随分といろんなことがあつたが、その中でも、潮見実先生との数多くの思い出の中の一二をあげますと、私卒論の為、山口県下のH市のY工場(従業員二、〇〇〇人以上)の従業員の意識調査を一年以上もかけて準備を整え、工場の担当課長とも再三会つてOKをとり、いよいよという時に、前例がないのでの本社よりの指示で中止。わざわざ研究室まで会社よりお越しになりお詫びがあつたとは申せ卒論に大きな影響、先生方からは調査できずともよいと慰められました。大学内だけでなく多くの友人、地域の方々、農協その他関係者のご助力やご協力に申しわけなく、諦めきれないところでした。

それから数日もおかない忘れもしない昭和三十七年十一月二十九日、朝方十時頃でした。先生から付いておいでといわれ、いわれる通りついて行きますと、ある事務所に入れられ、私を紹介されそこで初めて意図がわかり、早速その足でH市に行くことになりました。先生は寒い中外套も研究室に置かれたままで着用されず私と一緒にK工場へ(この工場も従業員二、〇〇〇人以上)話は進み念願の調査にこぎつきました。同じ市内に同じような規模・性格の工場があつたラッキー、友人や先輩達が沢山手伝ってくれたこともさることながら、先生のこの時の「寒いな」といわれながら同行して下さつたあの姿は一生忘れられないものとなっております。卒業後その時期になるとお手紙を出しておりましたが、その後先生は山大を停年退官、大阪、京都の大学へ住居も変えられました。が度々来山、その都度ハガキやお電話があり、先輩の方々と一緒に先生に会うのが楽しみとなりました。そんなある日、湯田のかめ福旅館に夕方山

口県の厚狭から駆けつけると先生はお風呂に入ろうとおっしゃる。二人で入っていると回りの人達が親子さんですかうらやましいと。夕食の後遅くまで二人でお話し十一時近くになりましたので部屋を出ますといつものように玄関まで降りて送られる。これには頭が下がります。帰り際、部屋付きの仲居さんに、急いで来たので先生へのお土産がないので依頼し、今夜は冷え込むのでお風邪引かれないように十分気をつけてあげてほしいと重ねて玄関先で頼む。三日ほどして先生より札状届く。(いつもこまめに出来る)その中に、君の帰った翌朝、昨夜の仲居が来て、内容はわからないが、しばらく涙を流して「先生は良い教養子を持たれた」というのだ。又楽しみにしているところ。普段と変らず格別のこととは何一つなかったのであるが。その後、先生は東京に居をかまえられるとすぐお亡くなりになられて、もう八年。上京の折に寄ること数度、今にもそこに座って、「よく来たね。元気でやっているかね」とおっしゃっている気がする。不思議と元気づけられるのです。先生には一杯の仕事で、そしてかなうものであるなら先輩・友人・後輩のためにお手伝いをするこ

とで恩返しをしたいと思っています。(山口県立美術館普及課長)

私の中の山口

豊田澄子(旧姓森川)

(英米文学・文理第十七回卒)

季節の移ろいを、日々の日常性の中で、これ程身近に、しかもさりげなく感じさせる町は、そうざらにあるものではない。柳、桜をこきまぜて、全ておぼろにかすむ春。柳の緑がうつとおしくなる頃、ホタルがとび、河鹿

の音が耳に快い初夏。キャンパスの銀杏の木が一本まるごと黄に染まり、夕日に映える秋。自然と共に息づいている山口の美しさは、モダンな町づくりがなされた今も変わらないことと思う。しかし反面、山口は美しすぎたのではないだろうか。閑静でありすぎたのではないだろうか。殊に私のように、外からの刺激を受けずとも自身の力で自己燃焼する程の才覚のない者には、その美しさの中でかえって出口なしの状況に追いこまれた観念にしもあらずである。焦燥感にかられつつ、さりとてなす術もなく、あげくの果ては自己嫌悪に陥り無力感に打ちひしがれ、それでも何かのほずみで気をとりなおし……そんなことのくり返りだった。うつ／＼とした気分での足跡を辿るといえば「モンタン」。決してごきれいな店ではないが、あの穴ぐらの様な薄暗さが、私には居心地がよかった。無為に時を過す者を咎める風もなく、身を潜める場所を提供してくれた。お姉さん(何故か誰もママとは呼んでいなかった)の心持た冷淡さも、かえって救いでもあった……。

イヴ・モンタンが彼女のお気に入り店の名にしたらしかった。「何人ものシャンソン歌手が歌っているけれど『枯葉』はやつぱりモンタンでなくちゃ……」と言いつつ、レコードをかけてくれた。どちらかといえば社会人よりも学生の溜り場になっていたようだ。各人各様の時の過し方をしていたが、時には活動家風の学生がオルグしているといった少々場違いな風景もあった。そういうえば、七〇年安保を目前に控えたあの頃は、学生運動の材料が揃っていた。ヴェトナム、原水禁、日韓、原潜、大管法、etc. しかしモンタンにはあまりに明快にわかりられる話は似合わないか



一人コーヒーを飲んだ「きれん」

いく事も出来ず、かといって無視することもできず、無様にもただ横目で眺めていた。ともかくも、今、思い出すことといえは、モンタンのホットケーキの味……とは、益々お粗末な話だが……。しかしモンタンのホットケーキは抜群に美味しかった。あの味をもう一度……と何年かぶりに訪ねた時、残念なこと既に経営者が変わり、かつてのモンタンではなくなっていた。霧がたちこめたような、モノトーンの世界が原色にぬりかえられたような模様替えだった。

随想

一居明子(旧姓西)

(国語学国文学・文理第二十三回卒)

山大での四年間の学生生活をふりかえってみて、あの頃私の関心というのは私自身にあ

って何か内へ内へと向かって毎日をすごしていったような気がします。今思うに、あんなにもたつぷりと自分だけの時間があつたのに、もつと外に向かつていろんなことにチャレンジしておけばよかった……といささか残念です。(弁解するわけではないけれど)自分と向かい合つて、精一ぱい自分自身であろうとした点では、非常に情熱的だったし、精神的には主婦として生活している現在の何倍も密度の濃い時間をおくっていたんじゃないかとも思えます。

私が国文学を選んだ理由の一つに、私自身も含めて人間というものを知りたいという思いがあり、それは学生生活を送る中で常に考えていたことでもありました。その答えはいまだに??なのですが、あの頃の私は人生に対してひたすらで求道的でさえあり、見方によると利己的な人間だったかもしれませぬ。そういう何ともかたい女の子を真面目に受けとめてくれた何人かの友人と先生、そして不安定に揺れ動く精神をやさしく包んでくれた山口の自然——河原で見上げた空の青さと広さ、そして遠くの山の色。胸の奥の情熱を写し出してくれたような境内の紅葉、また、春の日がくれるころ薄暗い山すそで白く浮かび上つても思いにふけていた山桜の花……。青春の一コマと言つてしまえば、ハイそれで終わりだけれど、自分自身とゆつくりと時間をかけてつき会うことのできた山口での生活は、私の土台の一部分をつくってくれたかけがえのない四年間だったと思います。が、現在主婦として二人の子どもを育て、また「おはなしのおばちゃん」として図書館で子どもたちに昔話を語り、絵本を読んでもなかで、学生の頃もつと外に広く目を向けている人の考え、生き方に接しておくん

だったなあとも思うのです。

自分の子どもを育てる過程で、絵本にめぐりあい、「おはなし」を語るようになったのですが、何冊かの外国の作家の絵本を知ってゆくと、絵本なんて小さい子どもの見るもの、字が少くないし何となく低級なもの、それまで思っていた価値観みたいなものはくずれ去ってしまいました。そして学生の頃は日本の近代文学ばかり読んで、夏目漱石が最高だと思いい、外国の作品は翻訳に左右されるし本当のところはわからないんじゃないかと思っていた私は、なんて狭い見方をしていたんだろうとつくづく思われました。一冊の外国の絵本が、大人の私をこんなにもやわらかく豊かな気分にして楽しませてくれる、漱石の作品のすばらしさには変わりがないけれども、絵本にもこんなにもいいものがあるんだ、それは私にとつて大発見でした。

そう……もう一度山口であの頃のようなゆつたりとした時間がもてるというなら、どのように過ごすだろうか、いやいやこれからだつて時間はあるはず、もうたつぷりというわけにはいかないだろうし、あの頃のような一途なひたむきさはないけれど、いろんなことにチャレンジしていくとうと自分を励ましていきます。



連れだつて行った「ミコティ」

いま山大・山口は

人文学部研究室紹介

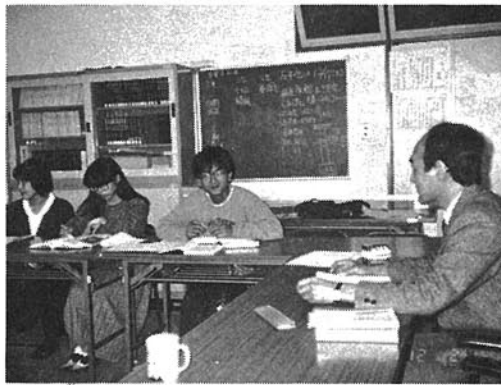
日本思想史学研究室

日本思想史学科は学部改組によって一九七八年に新設された、まだ歴史の浅い学科です。私が翌七九年に赴任してきた時、思想史関係の図書が附属図書館にも皆無に近い状態でした。学生諸君もずいぶん細かい思いをしたのではなないでしょうか。しかしそれもまことに止むをえなかつたのかもしれない。なにしろ、全国でも国立大学で日本思想史学科が設けられたのは東北大学について二番目だったのですから。

それにしても、アメリカや西ドイツを初めとする諸外国での日本研究が年々盛んになってきていることを思うと、本家本元の日本がこんな状態ではないのかと不安にもなります。そこには恐らく二つの理由が絡んでいます。一つは明治以来の日本の教育がもつぱら西洋に向けられていたこと、もう一つは、特に一九三〇年代に入ってからウルトラ・ナショナルリズムの問題です。当時、日本精神とか日本思想といえは、残念ながらそのお先棒をかつぐものでしかなかったわけです。そうした傾向への警戒心が最近再び強く求められるようになってきました。だからといって、日本人が日本人自身の過去の思想的営為を学ばなくてよいはずはありません。というわけで、日本思想史研究室は今日もなお健在です。一九八二年に第一回の卒業生を送り出して以降、今春までに六回、四六名の卒業生を送り出しました。中学・高校の教員、地方公務員、一般企業などで活躍しているほか、大学院に進学した者二名、現学部生の中にも二名の進学希望者が出ています。ただしその就職口がどうなるか、悩みのたねです。今春には高橋政博君と田中万由美さんが結婚して、日本思想史学科卒業生同士の初めてのカップルも生まれました。おめでたいことです。

現在の教員スタッフは私と豊沢一講師。

(山田洸教授)



研究室演習風景

特別寄稿

ケンブリッジにて

鈴木 木雅之

(英米文学助教授)
ブリテイッシュ・カウンシルのお世話で、昨年の八月から一年間英国はケンブリッジで

留学生を送った。話題に事欠かぬ一年であった。お色直したビッグ・ベン、ニュートンの「プリンキピア」出版(初版一六八七年)三〇〇周年を記念する色々な行事と見事な記念切手、テイトギャラリーに増築されたモダンなクロアギャラリーとそこに集められた光の画家ターナーの一大コレクション等々。他方、増加する一方のエイズ患者、数十年振りにヨーロッパを襲った大寒波による混乱等、暗いニュースも少なくない。

ロンドンから北北東へ電車で一時間余り。ここは人口約十萬の街ケンブリッジである。ケンブリッジ大学は十三世紀にさかのぼる伝統ある二十余のコレッジ(学寮)で構成されている。歴史的記憶の収蔵庫でもあるこれらのコレッジと点在する広大な公園とのたぐまぬ調和、なかでも通称バックスと呼ばれる緑地帯を流れるケム川の景観の美しさはたとえようもない。ケンブリッジが世界で最も美しい学園都市と呼ばれる所以でもある。

僕が属したコレッジの名はヒューズ・ホール。トリニティ・コレッジやキングズ・コレッジといった名門に比すれば、歴史は一〇〇年ちよつと(一八八五年創立)と浅い。しかし学生達の編む厳しい批評と風刺の満載した大学案内「ヴァーシテイ」に依れば、ヒューズ・ホールはこじんまりとして極めて居心地よく、食事も他のコレッジより「上等」とまず／＼の評判である。コレッジの長(学寮長)は、プロヴォオスト、マスター等様々な呼称をもつが、ヒューズ・ホールのそれはプレジデントと呼ばれ、現在はハーバートソン博士(病理学)がこれを務める。コレッジ・ライフのハイライトは、何となくハイテーブルコース付きの晩餐会——という儀式にある。ここに出席するこ

とを許されるのは、学寮長をはじめとする現、旧スタッフと客員フェローのみで、学生は勿論、配偶者を同行することも許されない。晩餐会は大体夕方の七時頃から始まる。先づ、テイルームでワイン及びシエリー酒を傾けながら歓談する。その間、学寮長は新入り？を他のメンバーに紹介して回る。ヒュース・ホールは他のコレッジと違いガウンを着ることはしないが、皆極めてフォーマルないでたちでやってくる。学寮長による紹介が一通り終った処で、おもむろにホールに向う。陽も沈み周囲は薄暗くなっているにも拘らず、明りは各テーブルに五、六本づつ置かれた赤いロソクのみ、四方の壁にかけられた名画に見守られながら各人好みの席につく。直ちに起立の合図があり、なんとラテン語で食前のお祈りがとなえられる。この間出席者はじつと黙想するのみ。つづいてフルコースの食事が始まる。これが終ると学寮長は特別ゲストを紹介しスタッフに礼を述べて、一堂再び先程のテイルームへ。ここでコーヒー、ミント入りのチョコレート、ポトワインで更に三〇分以上話さなければならぬ(ここまで約三時間)。

このハイテーブル・ヒュース・ホールでは月四〜五回だが、トリニティ・コレッジなどでは毎晩―すべてにキチンとつき合い、更に昼食会までこなすためには相当の体力と豊富な話題が必要のようだ。コレッジのメンバーにとっては確かに重要な情報交換の(とき)にはゴシップの(場)ではあろうが、僕には些かシンドイものと思われた。



あるイギリスの素顔

小谷典子 (社会学助教授)

十ヶ月ばかりのイギリスでの生活も、帰国後半年が過ぎてしまうと、遠い昔のこととなり、留学先のケント大学で知り合った友達から時折舞い込む手紙と、年間購読契約を結んできた週刊紙とが、かすかにイギリスの香り運んでくれる程度となった。

ところが肌寒さを感じる季節ともなると、昨冬の記録的な寒さがまざまざと思い出される。温暖な土地に生まれ育った私には、一週以上も雪に閉ざされ身動きとれないことも、一日中温度計が0度以上上がらないことも、興味深い体験であったが、この寒さのために何人も人が死んでいくという事実を、揺り籠から墓場まで、の最低限の生活が保障されているはずのイギリスの素顔としては、なかなか理解しがたかった。

テレビやラジオなどのマス・コミは「保温」をひっきりなしに訴え、住む家のない人びとに対して、教会が扉を開き、毛布や食べ物を提供しはじめたことが、大きなニュースとして報道されたりもした。政府は一定の条件を満たした生活保護世帯に、週五ポンドの特別暖房費を支払うことを決定した。

ロンドンのチャリングクロス駅近くの鉄道のガード下には、何人も人が寒さを防ぐためにダンボール箱を巧みに利用した寝床を作り、そこを営住の場所としており、この近くは、寒い日には、礼拝のために訪れたとは思えないような人びとがたむろしてあり、さらに街中いたる所に、いろいろな姿の物乞いが

見うけられた。

都心周辺の衰退地区(インナー・エリア)には、公営住宅に入居する資格のないアジア・アフリカ系の移民たちが、十分な暖房設備のない部屋に集住しており、イギリス社会への不適應現象に伴う貧困はじめ、さまざまな都市問題が渦巻いている。

私の住んでいたフラットは、ミドルクラスの居住地であるロンドン郊外のプロムリー区にあり、ここでは82パーセントが持家、14パーセントが公営住宅で、我々のような短期居住者が住める住宅はごくわずかであった。我々の八戸からなるフラットも、もともとは一戸建住宅であつたらしく、建物の前にも裏にも美しい庭があつた。周辺の家々のほとんどが、これとほぼ同じ広さの敷地をもつ一戸建住宅で、クリスマス近くになると、玄関先の立木に美しい飾りつけがなされ、夜にはそれに明かりが燈された。この静かな住宅地にも強盗が入つた、というニュースがローカル紙にデカデカと書きたてられたこともあつた。

このように住宅条件の空間的な不平等は、階層構造や人種構成と密接に関連しており、「住宅階級」という用語も定着している。しかし食料品は概して安く、最低限の生活だけは確保されている。イギリス人の消費生活は全体的に質素で、ブランド商品を買

いあざる日本人観光客の姿を、彼らは腹の底では嘲笑していたにちがいない。



山陰方言調査の旅、山陰方言調査室

人文学部創立十周年を迎えるにあたって

来月四月、旧文学部が人文学部に改組されて、十年の節目を迎えます。この間、旧文学部で学時代には比喩的な発展と充実をみることもできました。まず学科が人文学科と語学文学科の二学科になり、研究室は21講座になり、新しく開設された講座も日本思想史学、美学、美術史学、考古学、社会心理学、社会人類学、仏語・日文学、言語学があります。さらに昭和六十一年には大学院修士課程が設けられました。この十年間の人文学部の卒業生は六五〇人あまり。旧文学部で卒業した卒業生を加えると総勢二、八〇〇名を超えます。大学院修了者は六名です。旧文学部で卒業した者にも増して、広い方面で卒業者が活躍していることは皆様のすでにご存じのことです。

さて、人文学部創立十周年を迎えるにあたって、記念事業を企画してはいいかが、というご意見をいただいています。このご意見に対して学内幹事を中心に頭をひねってはいませんがなかなか好意画を捻り出すことができません。卒業生は、一八八九年には、文学部四十周年を迎えます。文学部と人文学部がほぼ時を同じくして一つの節目を迎えます。人文学部の卒業生も皆、幅広いことと、文学部・文学部の卒業生も皆、幅広い範囲の方々のご意見を聴かせていただければ幸いです。

さて、学内幹事が個人的にうかがった意見の中には、次のようなものがありました。
①講演会の開催。各分野で活躍されている多くの諸先輩の中から数度に渡って様々のテーマでお話しただく、というわけです。統一テーマ、対象などまだ充分検討しておりません。ふさわしいものがあつたら是非ご意見をお寄せ下さい。
②記念植樹。人文学部が一つの節目を迎えるにあつて、何か記念を残したいという意見がありました。中でも、人文学部はまだ歴史が浅く、建物の周囲の環境整備も充分ではありません。そこで、植樹をして少しでも研究と学生生活の場としてふさわしい環境作りの一助となれば、というご意見です。

この他、いくつかがのご意見があがっており、十周年記念にふさわしい記念事業を企画したいと考えています。どうか、皆様の忌憚のないご意見をお聴かせ下さるようお願いいたします。

(鴻文会幹事)

鴻文会第8回役員会

昭和62年6月13日

昭和61年度事業報告

61. 5. 23 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会（和田会長出席）
 6. 14 第7回役員会
 12. 15 「鴻文会会報第6号」発行

昭和61年度収支決算書

収入の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	4,326,070円	4,326,070円	0円	前年度より繰越金
会費収入	1,455,000	1,849,950	394,950	5,000円×370（一人、-50円）
名簿売上収入	0	2,000	2,000	1985年版二冊
雑収入	260,000	219,151	△ 40,849	証券、預金利子ほか
合 計	6,041,070	6,397,171	356,101	

支出の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会議費	40,000円	18,760円	21,240円	役員会（60.6.14） 18,760円（車代17,000円+茶菓子1,760円）
印刷費	130,000	115,000	15,000	会報印刷作成費（2,700部）115,000円
郵送費	150,000	140,390	9,610	役員会案内葉書1,200円、 会報郵送料（60円×2,314）138,840円、 その他350円
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	70,000	62,500	7,500	会報発送宛名書きアルバイト37,500円、 幹事用謝金25,000円
雑費	20,000	292,370	△272,370	鴻文会封筒（角3, 10,000枚）36,000円、 会費返却金（郵便振替）241,260円、 用紙代910円、ゴム印代2,900円、 現金封筒（20円×65）1,300円、 理学部同窓会総会への祝金10,000円
予備費 次年度へ繰越金	5,531,070	0 5,668,151	5,531,070 △ 5,668,151	
合 計	6,041,070	6,397,171	△ 356,101	

昭和62年6月13日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 森田良吉 ㊟

行村和男 ㊟

昭和 62 年度 事業 計画

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (5月11日)
2. 第8回役員会 (6月13日)
3. 「鴻文会会報第7号」発行 (12月)
4. その他

昭和 62 年度 予算

収入の部

科 目	62年度予算額	61年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	5,678,151円	4,326,070円	1,352,081円	
会費収入	1,200,000	1,455,000	△ 255,000	新生児 5,000円×190、卒業生 5,000円×50
雑収入	200,000	260,000	△ 60,000	証券、預金利子ほか
合 計	7,078,151	6,041,070	1,037,081	

支出の部

科 目	62年度予算額	61年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	40,000円	40,000円	0円	役員会 40,000円 (車代等含む)
印刷費	140,000	130,000	10,000	会報印刷作成費 (2,800部) 140,000円
郵送費	160,000	150,000	10,000	役員会用葉書 1,500円 会報郵送料 156,000円 (60円×2,600) 通信連絡費 2,500円
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	70,000	70,000	0	会報用アルバイト 40,000円 幹事用等謝金 30,000円
雑費	20,000	20,000	0	文具類等
予備費	6,548,151	5,531,070	1,017,081	
合 計	7,078,151	6,041,070	1,037,081	

各研究室同窓会紹介

- 国語学国文学
昭和六十二年二月二十二日
毛利水軍 (湯田) 十七名

- 英語学英米文学
昭和六十二年七月六日
「吉武博先生を囲む会」
割烹きむら (湯田) 八名

- 常盤ホテル
昭和六十二年八月六日
第二十四期同窓会 六名

- 双葉和風レストラン
昭和六十二年八月十六日
第二十七・二十八・二十九期 (三期の会) 十四名

- よし家旅館
昭和六十二年十一月二十八日
第七回イギリス会 七名

- ホテル石田屋
昭和六十二年七月四日
社会学・社会心理学 十一名

- 東京平河会館
昭和六十二年七月四日
社会学 二十八名

- 社会人類学
同窓会は開いていませんが、「山口人類学」第2号を発売、研究室の動静を同窓生に知らせております。



昭和六十一年度
人文学部卒業生就職状況

卒業者数 一六三名
就職者数 一四一名
大学院進学者数 八名

哲学・倫理学
（株）リクリート、郵政省、小郡町役場
中国哲学
山之内製菓（株）、梅岡（株）、（株）総合計画研究所
日本思想史学
秦野市役所、（株）教育文化社、山口大学大学院
人文科学研究科、福岡市役所、（株）デンサン
美学美術史

内野（株）、山口大学大学院人文科学研究科、
（株）産報通信社、（株）総合ナリコミ社、岡山大
学大学院文学研究科
国史学
北九州予備校、山口大学大学院人文科学研究
究科、柳井市役所、山口県警察、（株）教育文
化社、（株）日本ビジネスコンサルタント、松
永開発（株）スペースセンター、（株）富士通ソ
シアルサイエンスラボラトリー、（株）富士通流
通システムエンジニアリング、山口大学大
学院人文科学研究科、北九州予備校

東洋史学
エフコープ生活協同組合、宇部市西岐波中
学校、三洋証券（株）、（株）アイネス、下関中央
工業高等学校
西洋史学
徳山市立太華中学校、（株）日本ビジネスコン
サルタント、ソシエワールド、山口県庁、
山口大学大学院人文科学研究科、（株）日本ビ
ジネスコンサルタント、日興証券（株）、九州
地方建設局、（株）井筒屋、（株）エムラ
考古学
山口放送（株）、山口大学大学院人文科学研究
科、広島大学大学院文学研究科、日本電信
電話（株）
社会学・社会心理学・社会人類学

（株）富士通中国システムエンジニアリング、
広島市役所、キヤノン販売（株）、日本電信電
話（株）、奈古高等学校（須佐分校）、職業安定
所、（株）大阪有線放送社、山田興産（株）、日本
ケーブルメディアエンジニアリング、西鉄旅
行（株）、新日鉄化学（株）、柳井市役所、日本情
報サービス（株）、アンド・フォトグラフィ、（株）
タカキュー、大村印刷（株）、日本電信電話（株）、
三菱電気コントロールソフトウエア（株）、（株）
ユニード、新出光石油（株）、（株）システムコン
サルタント、北茂安中学校（佐賀県）、熊本
大学、テレビ山口（株）、（株）ゼンリン、（株）小学
館プロダクション、
国語学
久賀高等学校、田布施農業高等学校（大島
分校）、和気閑谷高等学校（岡山県）、連島中
学校（岡山県）、新生商事（株）、小野田工業高
等学校、中央出版社（株）、（株）富士通山口シス
テムエンジニアリング、瀬戸田高等学校（
広島県）、山口鴻城高等学校（非常勤）

国文学
鶴崎工業高等学校（非常勤）、福山工業高等
学校（広島県）、アルプス電気（株）、萩高等学
校、ジャスコ（株）、平生町役場、宇部情報シ
ステム、（株）日本エル・シー・エ（大阪）
中国語学・中国文学
（株）アイネス、福山工業高等学校（広島県）、
宇部女子高等学校（非常勤）、東京丸一商事
（株）、（株）富士通山口システムエンジニアリン
グ、日中旅行社（株）、住商機電貿易（株）
英語学
日本電信電話（株）、日本ユニバックソフトエ
ンジニアリング（株）、福山ポートサービス（株）、
萩商業高等学校、山口県庁、佐伯鶴城高等
学校、東洋証券（株）、日本生命保険相互会社、
磯村塾、（株）ダイエー、中央出版社（株）
英米文学
シーエーアイシステム（株）、（株）長府製作所、
（株）船場、大阪府教員（非常勤）、（株）イズミ、
（株）第一学習社、岩陽高等学校、美祿高等学
校、（株）タカキベーカー、久賀高等学校

ドイツ語学・ドイツ文学
大分県庁、響高等学校、岩国土木事務所、
岩国市役所
フラン語学・フランス文学
大倉建設（株）、三井石油化学工業（株）、全日本
空輸（株）、聴講生、山口県教育委員会、山口
市役所、文化服装学院、日電東芝情報シス
テム（株）、鹿野高等学校、日本電信電話（株）、
九州日本電気ソフトウエア（株）、ニッセキ
ハウス工業（株）山口営業、テレビ山口（株）、（株）
サン書店、鷗州塾
言語学
（株）長府製作所、研究生、（株）第一学習社、小
田（株）、（株）ニチイ、山口県勤労者福祉事業
団、（株）モニ、徳山北高等学校、（株）日本ビジ
ネスコンサルタント、豊北高等学校、日本
電気ホームエレクトロニクス（株）、聴講生
大学院
千葉大学大学院文学研究科（修士）、山口市
地域文化
役所
言語文化
早稲田大学大学院文学研究科（博士）、山口
農業高等学校



○「鴻文会会報」第7号やつと刷り上がりしました。
「早め早めに発行する体制をととのえよ」との御
意見をたくさん頂戴しながら、かえってそれに背
くような編集の遅れ方、皆さんの困惑の表情がみ
えるようです。発行年月日は62年内になつていま
すが、お届けするのは新年になりそうです。
○今号は「卒業生の就職先をもっと具体的に」と
いう声にお応えして、各研究室ごとに、個人名は
伏せて就職状況をお知らせし、会員情報は、色々
障りになることも多々あるやに聞きましたので、
少しお休みして再検討させていただきました。会員
の方からの近況・通信は大幅に増えて四本、それ
ぞれの職場での御活躍のさまが手に取るようにう
かがえます。
○何葉かの写真は、近況報告の豊田澄子さんの文
章に刺戟されて、ペダルを踏んで山口市内に行き
カメラにおさめてきたなじみの喫茶店の唯今の姿
です。
○一九八七年も残りわずか新しい童年の皆さまの
御健康と存分の御活躍を心からお祈り申し上げます。

編集後記

終身会費未納の方は至急お納め下さい
ますようお願いいたします。未納の方
には振替用紙を同封いたしました。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座 下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

